

琉球弧に伝わる漁師の舟を調査して

—地元伝統工芸を通しての職業教育—

徳 永 博 仁

第一工業大学 准教授 共通教育センター

(〒899-4395 鹿児島県霧島市国分中央 1-10-2)

E-mail: h-tokunaga@daiichi-koudai.ac.jp

奄美大島は、鹿児島市の南約380 kmに位置し琉球列島の一つです。奄美では本土の縄文時代に貝塚時代が起き人々は海を中心とした生活をしていました。島外との交易も行っていました。奄美世、按司世、那覇世、大和世と独特の歴史を持ち島外からの影響を受けながら先人たちは逞しく生き抜き独自の文化を育み現代へと繋がっています。

奄美の海は、サンゴ礁が沖へ沖へと発達してできた入り江が多く、沖のサンゴ礁に白波が立つと静かな海になります。漁師は遠浅の海で瀬舟を使い漁をしていました。1960年代は、エンジン付きの船がほとんどでしたが、奄美で生まれた木造船「板付け船」や「アイノコ」がありました。また、一本の木を削り抜いて造られた丸木舟も見たことがあります。県立高校の教員であった頃、生徒・職員と一緒に地元船大工のご指導もいただきながら瀬舟を造るという貴重な経験もしました。「自己肯定感を育てる職業教育」の実践に役立てたいという思いで現在、地元奄美を振り返り先人たちの知恵と技術について調査研究を続けています。今回は、琉球弧の丸木舟について報告します。

Keywords: 「琉球弧」 「丸木舟」 「貝斧」 「石斧」 「丸ノミ形石斧」 「セブネ」

1 はじめに

奄美大島は沖縄と鹿児島の間地点当たりにある。太古の昔に大陸から遮断された島で、世界遺産に匹敵する独自に進化した動植物や固有種が多く存在しています。また、歴史的にも本土の縄文時代草創期には、人々が居住し海の幸に恵まれた土地で貝塚時代が起きます。8世紀から9世紀の本土の奈良・平安時代の頃には、奄美世(アマムニ)という時代を迎え、集落(マキョ)共同体時代ともいわれ血縁関係で生活していたといわれます。按司世(アジユ)という時代が9世紀から15世紀半ば頃までつづきます。本土では、平安・鎌倉・室町時代の頃です。奄美の各地に源氏・平

家の伝説があります。方言に万葉言葉が残っているのはこの頃の影響であると思われます。この時代奄美では、勢力を持った人たちが現れ、大島を支配していました。10世紀頃から太宰府を介して大和朝廷との交易が盛んになります。ヤコウガイは当時の貴族たちに重宝がられていました。ヤコウガイなどの貝を輸出して、九州や大陸からは、鉄を輸入しヤコウガイの加工技術が向上します。小湊フワガネク遺跡(奄美市)などを中心にしたこれらの遺跡からはヤコウガイが大量に出土しています。ヤコウガイなどをサンゴ礁の海から集積し、貝を装飾品に加工する技術、大和と交易できる社会が成立していたとされています。

その後は、琉球王朝に統治され那覇世（ナハンユ）、薩摩藩の支配を受けた大和世（ヤマトユ）を迎えます。奄美の人々は、それぞれの時代の影響を受けながら、独自の文化を築き逞しく生き抜いてきました。先人の知恵に学び学校教育における「職業教育」の参考になればという思いで奄美で生まれの漁船「丸木舟」「板付け船」「アイノコ」を調査研究し奄美の遺跡や歴史資料、文献等を参考に琉球弧における漁船について調べ琉球文化との関係性に注目した。

2 琉球列島

1) 琉球列島の成り立ち

琉球列島は、千島列島や本州島が円弧を描くように鹿児島県大隅半島の南、種子島、屋久島、馬毛島からはじまりトカラ列島、奄美諸島、琉球列島の島々が台湾島へと連なっています。この島嶼群を琉球弧と呼んでいます。

琉球弧の島々は、更新世前紀（約200万～1500万年前）氷河期の頃に陸化しユーラシア大陸とつながります。その時、アマミノクロウサギやケナガネズミなどの動植物が移動し現在もその時の姿のままで残っているとされています。独特の自然があり東洋のガラパゴスとも呼ばれています。

島々の成り立ちは、氷河期など気候の変化やユーラシアプレートにフィリピン海プレートが沈み込む地殻の変動や火山活動の影響を受け隆起や沈降を繰り返してできた島嶼群です。

これらの島々の地形をみると、山地の有無によって「高島」と「低島」に分けることができます。「高島」は火山や古生代から新世代古第三紀の古い地質の島です。川があり水が豊富にあります。「低島」は新第三紀の島尻層群泥岩類とそれを覆う第四紀琉球石灰岩の新しい地質の島です。海底が隆起や沈降を繰り返してできた島で平坦で段丘があります。川が少なく井戸を掘り地下水を汲み上げています。

琉球列島の島々には、裾礁と呼ばれるサンゴ礁が発達して湾の入り口を塞ぐように自然の防波堤を形成しています。（引用：奄美諸島「先

史古代の奄美諸島」鹿児島県立埋蔵文化センター）

2) 奄美諸島（中琉球島）

奄美の古代の人々は、いつごろから丸木舟を使い漁業を行ってきたのか、奄美にある遺跡からは、特に丸木舟が発見されたという事実はありません。ただ、黒曜石など舟づくりに必要な石斧などの石器が出土しています。

3 丸木舟はいつごろから琉球弧でつくられたか

1) 琉球弧の丸木舟

国内最古となる約7500年前の丸木舟が、千葉県市川市の「雷下遺跡」から出土した。

発見された舟は、ムクノキをくりぬいた丸木舟で全長約7.2メートル、幅約50センチで船尾部分が破損しているが、船首部分は40センチあることから少なくとも7.6メートル以上はある当時としては大型の舟であったようです。



約7500年前の丸木舟

（引用・参考：「雷下遺跡の概要」沖松信孝：千葉県教育振興財団）

北琉球の島々は、旧石器時代以来、南九州の文化圏に属し、九州の土器文化を受け入れ、西日本の文化と歩みを共にしています。したがって種子島、屋久島、馬毛島は本土の中に含まれます。中琉球（奄美諸島）や南琉球（沖縄諸島）に、縄文文化が伝わるのは大幅に遅れます。旧石器から縄文草創期頃に遺跡のない時代・無人時代の部分は歴史の空白部分であると言われています。7000年前頃、中琉球に九州の縄文文化が伝わり、貝塚時代が始まります。（引用：「沖縄の歴史」岩井國臣：国土政策研究会）

沖縄と本土の時代区分																
本土 (沖縄北部地域)	旧石器	縄文			弥生	古墳	奈良平安	鎌倉室町	江戸	明治						
沖縄	中部 (遺跡数)	7	縄文時代			古墳時代			琉球王国							
	南部 (遺跡数)	遺跡のない時代・無人時代?	早期	前期	中	後期	古墳時代 (28)									
			南琉球新石器時代													
			前期	後期												
			7	11												
			前10000	前6000	前4000	前2000	前1000	紀元	300	600	900	1200	1400	1600	1800	1900

沖縄と本土の時代区分：「沖縄の歴史」より

(1) 南九州の縄文時代

東シナ海の琉球弧の島嶼群からは、まだ古代の丸木舟は出ていない。鹿児島県南さつま市の「梶ノ原遺跡」からは、縄文時代草創期の地層から磨製石斧、丸ノミ型石斧が出土している。これらの石器は、大木を切り倒しそれを削り抜いて丸木舟を作ることができたと言われていますが、当時の丸木舟は発見されていません。

(参考：「丸ノミ形石斧」



縄文時代草創期梶ノ原遺跡 丸ノミ形石斧レプリカ
跡：上野原縄文の森展示館展示物)

(2) 北琉球の縄文時代

縄文時代草創期の北琉球島の種子島（西之市）奥ノ仁田遺跡や鬼ヶ野遺跡からも、磨製石鏃・丸ノミ型石斧・磨石と石皿などが大量に出土している。石器製作遺跡や石斧の破損品とともに砥石もあることから、石斧の修復が行われていたと考えられています。磨製石鏃が草創期から存在したこと、竪穴住居跡を構築していたこと、島では産出することのできなかつた黒曜石が出土したこと、島の外から持ち込まれたものであり島外との交易があったことが考えられます。丸ノミ形石斧は、丸木舟の製作に用いられたと考えられており、丸木船による海上交通が行なわれたと推測されています。

(引用：大隅諸島・トカラ列島「先史・古代の大隅諸島・トカラ列島」：鹿児島県立埋蔵文化センター)

(3) 中琉球の貝塚時代

中琉球の奄美本島の笠利町土浜ヤーヤー遺跡からは、約 25,000 年前の始良カルデラ噴出物の A T 火山灰の下位から磨製石斧 3 点が出土しています。土浜ヤーヤー遺跡は奄美諸島で初めての旧石器時代の遺物が発見され、奄美諸島の歴史が旧石器時代までさか上がることが判明しています。また、アカホヤ火山灰と相前後する層位より石斧、石鏃、土器片が出土

し、縄文時代でも古い時期の遺物が発見されています。本土の縄文文化との交流が考えられます。(引用：奄美諸島「先史・古代の奄美諸島」：鹿児島県立埋蔵文化センター)

7300 年前は、鬼界カルデラが大噴火を起こし火砕流が薩摩半島に押し寄せ南薩摩の縄文人は、北へ避難したといわれています。その後も始良カルデラの噴火もあり火山活動が盛んになったため琉球と九州島との交易がしばらく途絶えたようです。

(4) 南琉球の新石器時代

南さつま市の梶ノ原遺跡からは丸ノミ石斧が出土していますが、それ以前に貝斧文化を持ったスダンランド人が南琉球の八重山に渡りシャコウガイ製の貝斧を発達させ丸ノミ石斧で外洋航海型の丸木舟が作られていたと考えられています。7 万年前ほどから地球は氷河期に入り、陸地の川や湖の大量の水が氷として固定されたために海水面が低下し、東南アジアにはスダンランドという広大な陸地が広がったと言われています。

2) 本土と琉球の丸木舟

(1) 本土の縄文時代の丸木舟

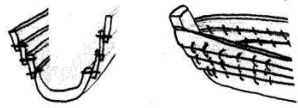
縄文時代につくられた出土した丸木舟は、全長 5~7m、幅 50~60cm で、かつおぶしのような形をしています。船材は、おおむね太平洋側がカヤ、日本海側はスギでした。

縄文人は丸木舟を沿岸や河川、湖沼での交通や漁猟に用いましたが、時には海を渡ることもありました。それは島根県沖の隠岐島や伊豆諸島の神津島で産出される黒曜石が各地の遺跡から出土しているためです。縄文人は海を丸木舟で渡り黒曜石を手に入れていたと考えられています。(引用：「和船はどのように発達したか」安達裕之：日本海史学会)

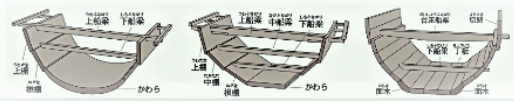
また、技術的には、石斧や丸ノミ形石斧の出現で木を倒し削り抜く加工技術が確立し丸木舟が作られるようになったと思われます。

土器や石器などの交易が盛んになるにしたがって荷物を大量に積むために棚板が丸木舟

に取り付けられるようになります。



丸木舟に柵板が取り付けられる。



船底材の丸木舟(かわら)に柵板を取り付けた準工造船は、全面板構造の和瀬へと発達してゆく(引用:『復元日本大観 4—船』石井謙治:世界文化社)

(2) 琉球の貝塚時代の丸木舟は存在したか

琉球の貝塚時代の人々は、豊かな海からの恵みがあったために稲作よりは海での生業が中心でした。人々は海辺の砂丘地に住み、目の前の珊瑚礁の海から大型の貝をはじめ海産物を得て生活していました。

本土からの石器や土器の交易があったことは、奄美大島の遺跡からの出土品から明らかになっている。しかし、丸木舟については、まだ発見されていません。役目を終えた丸木舟は、建築材などに加工されリサイクルによって原型を残すことがなかったのではないかとされています。

先に述べたスダンランドから琉球に渡ってきた人々は、すでにシャコウガイ製の貝斧を持ちそれを発達させた丸ノミ形石斧で外洋航海型の丸木舟を作る技術があったと考えられています。琉球列島の高島は山深く、タブノキ、スダジイ、リュウキュウマツなどが森を覆い貝塚時代の人々は、直径1m以上もある大木を石斧で切り倒し、丸ノミ形石斧を使い舟型に削りぬいて丸木舟をつくったと思われます。(引用:「琉球弧の考古学」小田静夫)

3) 近年の琉球弧の丸木舟

(1) 奄美の丸木舟 (引用: 奄美市住用村「和瀬民俗誌」1980年: 旧住用村教育委員会)

1940年代はじめの頃、奄美市内でも丸木舟が存在していた。私が小学生の頃(1960年代)、砂浜に陸揚げされていた丸木舟を見たことがある。

奄美市住用にある和瀬集落の民族誌に丸木舟製作の記録がある。以下に表す。

「クリブネを作る木をフネギ(舟木)というタブ、イジュを使った6km離れたエボシ(山の名)で木を倒し、舟の形にあらけずりし内側も掘ってからおろした。明治35年生まれの子どものころ父親の手伝いに行った経験がある。4人で行き二晩泊まった。

木への祭りや製作過程の祭りをしたことは覚えている。フネウルシ(方言: 舟を山からおろす)には、20人程の人たちが手伝いに集まった。15cm大のワラジナ(方言: 綱)をカイ(方言: 編む)てした。(訳: 舟を山からおろすために、ワラを編んで太さ15cmのわら縄を作った。)引く時の掛け声が「ヤイトコセー」と言った。その意味は、フネウルシなどは、8イトコ(従兄弟)の親類の協力を得て行われていたためだという話であった。「クリブネは、瀬にぶつけてた場合にも破れないので、重宝がられたが、時代の流れで無くなった。」(原文に忠実に表記した。)

奄美は、近年インフラが整備されてきたが、この民俗誌で書かれている1940年代は、隣の集落(シマ)に行くのも奥深い山の険しい陸路に行くより舟を使って海路を渡る方が安全であった。丸木舟は、隣集落への移動や珊瑚礁(リーフ)で囲まれた穏やかな海での漁、そして海路を利用した畑の移動など農作業にも使われていたと言われています。先に表現されている「ヤイトコセー」は、舟を山からおろす作業に限らず、台風の強風で家が吹き飛ばされたときに集落の人々が総出で家を抱えて元の位置に戻すときにも「ヤイトコセー」と掛け声をかけていたと聞いたことがあります。



丸木舟(所蔵: 鹿児島県立埋蔵文化センター)

助け合いの精神

「結い」の文化でもあります。

また、掛け声は「ヨイトコセー」と言い表す集落もあり言葉は集落ごとに表現の仕方

が違っています。

(2) 船の祭り (引用：「琉球弧における船と樹
霊振興」松尾恒一 国立歴史民俗博物館)

前述したようにクリブネを作るために山に入り舟づくりに使う樹を定めるときに祭りを
行います。琉球文化圏である奄美から沖縄の
島々には、姉妹をオナリ神として信仰する船
霊を祀る風習があります。ここでは、船づく
りに使われる樹木に対する信仰と船の安全祈
願や豊漁祈願など守護神としての女性神の信
仰とのかかわりについて報告します。

ア イビイス (エビス) 祭り

和瀬集落 (奄美市住用) 民族誌に船霊の
記録がある。

豊漁と航海安全を
願う正月の伝統行事
イビイス祭りです。



イビイス祭り

歌や焼酎でイビイス

(エビス) 様をもてなします。

ホドコ (船首近くの帆を立てるために取
り付けた横木、帆柱を立てるための穴があ
いている。) に霊がいるとして供え物をし
てまつります。 さしみが供えられ酒がか
けられます。それ以外に小皿に白米少々、
さかずき、二合びんが準備されます。白米
は、船全体にまかれお祓いをします。そし
て船主は、次のような祈願の呪言を唱えま
す。

「ちゅうぬ たまがりむんや 巻風 鯨
わんさば 竜巻 いきよ あわし しょん
な アートートガナシ 月ぬなんか
まつって ふーしよりゆんから 竜宮の神
様 お願いしい しょるんから ぎゅや大
漁べえり あらちくりんしょれ」

(意識：人間が恐れるものは、巻風、鯨、
サメ、竜巻です。これらに遭遇させないで
ください。お月様などをまつり 竜宮の神
様にもお願いしています。どうぞ大漁ばか
りつづきますようにお願いします。) この
ような海に関する祭事が各集落で行われて

いました。

呪言に出てくる竜宮は、海のかなたのネ
リヤカナヤ (沖縄：ニライカナイ) と呼ば
れる楽園のことで人間に豊穡をもたらす神
がいると信じられています。

イ 船霊とオナリ (うなり) 神

船霊として姉妹の毛髪を納めています。

奄美や沖縄では姉や妹が兄や弟の守護
神となるといったオナリ神信仰が広範囲に
みられます。

奄美の島唄“よいすら節”にこの風習が
うたわれています。

舟ぬ高艫 (たかどうも) にヨーイスーラ
舟ぬ高艫 (たかどうも) にヨーイスーラ

(スラヨーイスーラー)

白鳥 (しりゅどうり) ぬ座 (い) ちゅり

スラヨーイスーラヨーイ

(スラヨーイスラヨーイ)

白鳥 (しりゅどうり) やあらぬ

ヨーイスーラ

白鳥やあらぬヨーイスーラ

(スラヨーイスーラー)

姉妹神 (うなりがみ) がなし

スラヨーイスーラヨーイ

訳：舟の艫に白い鳥がとまっている

あれはただの白い鳥ではない

鳥の姿をしたうなり神さま・・・

このように島唄になっています。

ウ 船大工と木霊・船霊

船大工は、船材にする樹木を山の神の許
しを得て貰い受けるために祭祀を行いま
す。伐木の際の作法です。それは、木を倒
す前に、魔よけのために木の前で斧を三振
りすると、風もないのに木が揺れたり動き
出すことがあるそうです。このような木は、
木霊の宿る山の神木ですから伐ってはなり
ません。斧を振って何も起こらない木を舟
材として伐木します。

船が完成して、進水式を行う際に船霊を
籠める祭事が行われます。船大工は、米、

結んだ昆布、そして女性の髪の毛など7つ品を納め呪言を唱えます。

呪言は、山の神から貰い受けた舟材に対する感謝とネリヤカナヤ（沖縄：ニライカナイ）の竜宮の女神に航海の安全や豊漁を願う内容です。自然への恐れや深い敬意を感じます。琉球王朝統治時代のなごりが色濃く残る祭事です。

斧の両面には、三本、四本の線があります。その線は、木を倒す作業を見守る山の神へ信仰的な意味をあります。三本の線は「ミキ」で「神酒」を表しています。反対がわの四本の線は「ヨキ」で「四気」を表しています。四気とは、太陽・土・水・空気木を育てる気のこと。また、斧を「よき」と呼ぶのもこのことに由来します。

(3) 1/10丸木舟の再現

奄美と沖縄の丸木舟を再現しその特徴を調査します。

I 丸木舟に使った材木は、地元（鹿児島県霧島）産の杉材を使い、野ざらしで乾燥させた杉の丸太です。

II 丸太の削りぬきには、手斧を使い加工した。加工時に出る木くずを削りぬいている部分に入れ、それを燃やして炭状になったところを更に削り取って行きます。



このように一本木を削りぬく加工は、縄文時代の人々は、丸ノミ形石斧など道具を使いながら削り抜く部分の水で浸しそこに焼石を入れ木材をふやかして柔らかくして加工する方法や削り抜く部分を燃やしながら加工する方法があったようです。

縄文人の知恵に驚かされます。

ア 奄美の丸木舟

（引用・参考：奄美の丸木舟：鹿児島県埋蔵文化センター保存）

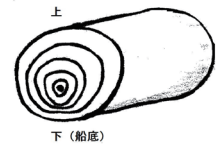
(ア) 奄美の丸木舟は、船首部分と船尾部分は同じ形をしており前後左右対称的です。

(イ) 全体的に原木の丸みをそのままいかした形である。前後にロープを繋ぐ取っ手のような形の物が加工されています。

(ウ) 船首と船尾部分は、丸みある形状をしている。鯉節型と言われる丸木舟となっています。（引用：「縄文丸木舟覚書」（房総の諸事情から）高橋統一）



(エ) 奄美の船大工から丸木舟の船首部分は、珊瑚礁など岩にぶつかっても壊れること

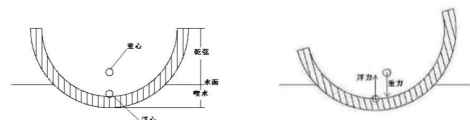


がないように木の根本付近を船首部分に、そして船底部分は年輪が密になっている樹木の北の部分を使っていると聞いたことがあります。木の根本の部分や年輪が密になっている部分は硬く強いため強度を必要とする船首や船底部分に使われています。

(オ) 丸太の形状をそのままに半円形の船底にすると、重心や浮心の関係からバランスをうまく取らないと転覆する舟です。

重心を低くする必要があります。

舟を操船するときは、船尾に座り櫂を使って漕ぎ舵も取ります。それ以外でも漁具や錨なども利用し舟の前後のバランスも取っていたようです。（引用：「古き良き丸木舟」（三浦福助、2007/09/10））



イ 琉球列島（西表島）の丸木舟（引用・参考：

「06 境界の変遷
ートカラ・奄美・
沖縄における丸木
舟の 変化ー」：

神奈川大学（板井英
伸氏））



写真：西表島のクリブネ
(琉球大学資料館・風樹館)

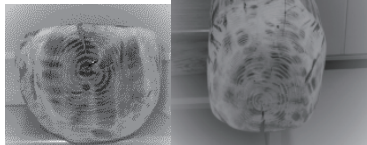
船首と船尾は跳ね上がり、中央部分が低くなっています。船首が細く絞られ中央部に向かって膨らみ再び船尾に向かって絞り込まれています。船尾を後方から見ると逆三角形の形をしています。

船底を断面で見ると、船首部分は、逆三角形に鋭く削られ波切をよくする形になっています。また、中央部分は平らな丸みのある船底となっています。サンゴ礁で囲まれた浅瀬で漁をする舟（セブネ）として利用されていました。

(3) 丸木舟の進化

ア 割竹型の縄文の丸木舟

石斧など
石器が中心
であった頃



の丸木舟づくりは、石斧で木を倒し、くさび形をした石器や硬い木材などを丸太にくり込ませそれを叩いて割り、半割となった平らな部分を丸ノミ形石斧などをつかって削り抜いた舟で割竹型の丸木舟です。

割竹型の丸木舟の船首は、進む方向に対して壁を作るような平らな面となっているため大きな抵抗が発生するような形になっています。

流水に浮かべると、水から受ける造波抵抗により波が立ち、盛り上がった波が丸木舟を押し戻そうとします。

前進を妨げるような強い波が現れます。



琉球弧の島々の湾は、沖を囲むようにサンゴ礁が形成します。このような珊瑚礁の

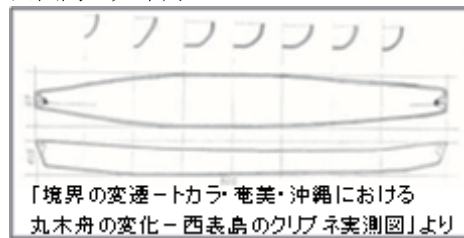
地形を裾礁と呼びます。裾礁に白波が立つと自然の波消ブロックとなり



外洋のうねりもなくなり湾内は静かな漁場となります。セブネとは、そういった場所で漁をする舟のことを言います。満潮時には、沖の波が再び砂浜に打ち寄せてきます。

そのような波を船首に受けた場合は、進みづらくなります。また、真横に波を受けると転覆する可能性もあります。縄文の海人は、そのような波やうねり、風をよみ安全に操船する技術が卓越していたと考えられます。

イ 西表島の丸木舟



西表のクリブネは、船首部分の船底が鋭く削られている。中央部分は、丸く平らになりサンゴ礁の岩に擦っても壊れないように丈夫にできています。

この図を参考に模型を作り流水に浮かべ観察すると、細かい波があり、推進方向に



写真：1/10模型

対して縄文の割竹型のクリブネよりも波切が良い舟になっています。船首部分の鋭く削られた船底の形が効果を表しています。

(参考：「境界の変遷ートカラ・奄美・沖縄における丸木舟の変化ー西表島のクリブネ実測図」より)



船首部分の鋭く削られた船底と反りかえ

るような構造は、バランスが取りずらく操船は座して行われていたようです。

波切が良いため早く進むことができ、進んでいる間は安定感のある舟です。漁場では座って重心を低くして安定感を保っていました。

ウ 丸木舟から接ぎ船

奄美では、いつの頃からか板付け船といわれる板材を接ぎ合わせる構造の船が造られるようになります。その中には、八尋船と呼ばれる20人以上が乗れる大型の船もありました。

明治の頃から奄美に糸満（沖縄）の漁師たちが漁場を求めてサバニでやってきました。大正時代に糸満でサバニの船大工のもとで修業を積んだ海老原万吉（宮崎県出身）は、大和村大金久（奄美）に住み安定感のある板付け船と速度の出るサバニの特徴を生かした折衷型の「アイノコ」という舟の造船をはじめます。

奄美の「板付け船」「アイノコ」と沖縄の「サバニ」については、調査を継続しているところです。

4 まとめ

琉球列島の西表（沖縄県）と奄美（鹿児島県）のクリブネに注目して検証してきました。

琉球列島には、丸木舟の舟材に適した大きな木のある高島で舟が造られ抵島でも丸木舟が使われていました。それぞれの島で漁法や内海、外海、遠洋などの使われる環境によって舟の形は様々である詳細については今後調査を試みたい。

残念ながら本土の縄文時代に匹敵するような丸木舟は、琉球列島から出土されていないが、琉球列島における貝塚時代の遺跡から見られる黒曜石や土器の出土が島外との交易の事実を証明し、貝斧、石斧、丸ノミ形石斧などの工具の出土は、丸木舟を造る技術があったことを示しています。この時代の丸木舟が発見されるのを期待します。

今後も、幾多の困難な時代を逞しく生き抜いた先人の知恵やその技術に学び学校教育における

「職業教育」に役立てたいという思いで研究を続けてまいりたいと思います。

5 最後に（謝辞）

本研究を進めるにあたっては、研修者の皆様が地道に努力を重ねられまとめられた研究成果の貴重な論文や図・写真等を勉強させていただき引用・参考にさせていただきました。私は、幼い頃から石器に興味があり転勤や出張等でいろいろな地域を訪れるたびに歴史民俗資料館を巡ることを趣味としておりました。また、公立高校の教職員であった頃には、地元船大工の指導をいただきながら生徒の自己肯定感を高めたいという思いもあり「アイノコ」製作に挑戦することもできました。関わってくれた生徒・職員とともに先人の逞しさと知恵や技術に驚き感動しました。勉強させていただいた研究者の皆様感謝の意を込めまして掲載させていただきます。

〈参考にした文献等〉

- (1)「奄美の歴史入門」麓純雄 南方新社
- (2)奄美諸島「先史古代の奄美諸島」鹿児島県立埋蔵文化センター
- (3)「雷下遺跡の概要」沖松信孝 千葉県教育振興財団
- (4)大隅諸島・トカラ列島「先史・古代の大隅諸島・トカラ列島」鹿児島県立埋蔵文化センター
- (5)「沖縄の歴史」岩井國臣 国土政策研究会
- (6)奄美諸島「先史・古代の奄美諸島」鹿児島県立埋蔵文化センター
- (7)「和船はどのように発達したか」安達裕之 日本海史事学会
- (8)『復元日本大観4—船』石井謙治 世界文化社
- (9)琉球弧の考古学」小田静夫
- (10)奄美市住用村「和瀬民俗誌」1980 旧住用村教育委員会
- (11)「琉球弧における船と樹霊信仰」松尾恒一 国立民俗博物館研究部
- (12)「奄美の丸木舟」鹿児島県埋蔵文化センター所蔵
- (13)「縄文丸木舟覚書」房総の諸事情から 高橋統一
- (14)「丸木舟の形式分類」清水滴三
- (15)「古き良き丸木舟」三浦福助
- (16)「06 境界の変遷 —トカラ・奄美・沖縄における丸木舟の変化—」板井英伸 神奈川大学
- (17)「写真 西表島のクリブネ」琉球大学資料館・風樹館